

スペースシャワー列伝 第130巻～桃源洞裡(とうげんどうり)の宴～ ライブレポート  
never young beach / Tempalay / Rei / SANABAGUN.

株式会社スペースシャワーネットワーク(本社: 東京都港区 代表取締役社長:清水英明)が運営する日本最大の音楽専門チャンネル スペースシャワーTVは、ライブイベント「スペースシャワー列伝 第130巻～桃源洞裡(とうげんどうり)の宴～」を5月17日(火)に、TSUTAYA O-nestにて開催いたしました。

春の列伝開催! 心地良い陽気の中で聴きたいグッドミュージックを奏でるアーティスト達が登場。  
never young beach / Tempalay / Rei / SANABAGUN. による俗世や時代の流れから一歩離れた理想郷のような一夜。

つきましてはライブレポート、セットリスト、およびライブ写真素材をお送りいたしますので、是非貴媒体で取上げていただければ幸いです。ご検討の程、何卒宜しくお願い致します。

Photo by MASANORI FUJIKAWA



《イベント概要》スペースシャワー列伝 第130巻～桃源洞裡(とうげんどうり)の宴～

【日時】2016年5月17日(火) @ TSUTAYA O-nest

【出演】never young beach / Tempalay / Rei / SANABAGUN.

【WEB】<http://sstv.jp/retsuden>

【Twitter】@retsuden\_sstv 【Instagram】@retsuden 【主催・企画・制作】スペースシャワーTV

ライブの模様をスペースシャワーTVにてオンエア!

【初回放送】2016年6月30日(木)23:00～24:00 ※リピート放送有

## ◆スペースシャワー列伝 第130巻～桃源洞裡(とうげんどうり)の宴～ -オフィシャルライブレポート-

今年で16年目に突入し、のべ500組以上のアーティストたちが出演を果たしてきたスペースシャワー列伝。記念すべき第130回目となる今回はサブ・タイトルに「桃源洞裡(とうげんどうり)の宴」と冠され、ある意味で“異色”とも呼べる若手アクト4組が一堂に会し、満員御礼のフロアを心地よいグルーヴ&サウンドで包み込んだ。

トップバッターを務めたのは、年明け早々にデビュー・アルバム『from JAPAN』をリリースし、米テキサスの音楽見本市SXSWにも出演を遂げたTempalay。恍惚としたギターの色音が印象的な“Band The Flower”で幕開けしたライブは、サイケデリックなリズム&ビートが生み出すトリップ感と、日本語の「響き」を突き詰めたような小原綾斗(Vo・G)のヴォーカルがとにかく気持ちよく、サポートで参加するAmy Furuhashiとのコーラスワークも相性抜群だ。「チューニングするの忘れちゃいました(笑)」。でも、皆さんも色んなこと忘れるためにここ来てるんですね?と小原が告げると、イントロからどこかストーン・ローゼズを思わせる未発表曲“JOE”を投下。全6曲の短いセットながら、その新人離れたポテンシャルの高さを見せつけるパフォーマンスだった。

二番手は弱冠5歳でブルーズに開眼し、Tempalayと並んで今年SXSWに出演したことも話題になったSSW/ギタリストのReiだ。2ndミニ『UNO』のインスト曲“Soleil”と共に登場するや否や、アメリカの荒野を駆け抜けるような“my mama”の爆音ロカビリーでオーディエンスを完全掌握。華奢なカラダからは想像できないパワフルなギター・プレイはウワサ以上で、続く“Black Cat”ではジョニー・ウィンターも真っ青のカッティングやハーモニカも披露するなど、その音楽的ポキャブラリーの豊富さにあちこちで熱い歓声が上がっていた。緊張のせいかMCは控えめだったが、リズム隊とのソロ・バトルに火花を散らした“OCD”から、自然とハンドクラップを巻き起こした“BLACK BANANA”へと至るクライマックスは間違いなくこの夜のハイライト。もはや全国区でのブレイクも時間の問題だろう。

Reiのバトンを受け取ったのは、昨年10月にメジャー・デビューを果たしたSANABAGUN。彼らの辞書に「肩慣らし」なんて言葉は無く、新曲“板ガム・ブメント”で幕を開けたライブは、笑い汗とグルーヴにまみれた地上最強のエンターテインメントだ。高岩遼(Vo)と岩間俊樹(MC)が「俺らがレベゼンゆとり教育」「平成生まれのヒップホップチーム」とお馴染みのフレーズを繰り出すと、またも新曲の“BED”を披露。艶のある高岩のヴォーカルには女性客もメロメロで、不穏なピアノ・リフが牽引する“デバ地下”、会場をダンスフロアへと変貌させた“居酒屋JAZZ”など、とにかくステージから放たれるエネルギー量が尋常じゃない。ゴキゲンなホーンが鳴り響くラストの“人間”では、コール&レスポンスもバッチリ決まり大団円。ワンマンかと見紛うフロアの加熱ぶりが、彼らの止まらぬ勢いを物語っていた。

そしてこの夜の大トリを飾ったのは、日本のサイケ/フォーク界の担い手となりつつあるnever young beach。トリとはいえ肩肘張らないスタンスが彼らの魅力だが、鈴木健人(Dr)がフライング気味にカウントを始めると、安部勇磨(Vo・G)が「おいおい、ちょっと待てよー(笑)」と突っ込んでオーディエンスの爆笑を誘う。気を取り直して1曲目は“夏がそうさせた”。O-nestのフロアは、たちまちヤシの木が揺れる夏のビーチへと姿を変えていく。6月8日には待望の2ndアルバム『fam fam』をリリースするネバヤンだが、この日は新曲も大盤振る舞い。ビートの疾走感がサーフィンにも打って付けな“MOTEL”や、リバーブの効いたヴォーカルとポジティブな歌詞が印象的な“fam fam”など、前作以上にトリプル・ギターの奏でるリフやソロが強力になり、個人的にはストロークスからの影響を色濃く感じたりもした。思えばリハの際にチーム・インパラの楽曲をベースで爪弾いてみたり、入場曲がデヴェンドラ・バンハート(ネバヤンは6月に予定される彼の来日公演で京都公演のオープニング・アクトを務める)の“This is the way”だったりもしたので、音楽ファンのツボを突くメロディー作りが本当に上手いのだ。

アンコールの“お別れの歌”では、阿南智史(Gt)のギターが外れてしまい演奏を2回もやり直すというハプニングが発生するも、「オマエ次でできなかったらボウズだかん！」と安部が茶化すシーンもあり、最後の最後までネバヤンらしい「ユルさ」がなぜか心地よいライブだった。MCでも明かされたが、今後様々なコラボレーションを実現していくそうなので、引き続き彼らの一挙手一投足から目を離さないでほしい。

なお、このライブの様子は6月30日(木)23:00~からスペースシャワーTVにてオンエア。

Text by Kohei UENO

## ◆SET LIST

**Tempalay**

<1>Band The Flower <2>Oh.My.God!! <3>made in Japan <4>JOE <5>Festival <6>Have a nice days club

**Rei**

<1>my mama <2>Black Cat <3>Long Way to Go <4>JUMP <5>Love Sick <6>OCD <7>BLACK BANANA

**SANABAGUN.**

<1>板ガム・ブメント <2>SANABAGUN. Theme (新Ver.) <3>BED

<4>デバ地下 <5>大渋滞 <6>居酒屋JAZZ <7>人間

**never young beach**

<1>夏がそうさせた <2>MOTEL <3>どんなかんじ? <4>あまり行かない喫茶店で

<5>fam fam <6>明るい未来 <7>どうでもいいけど <En.>お別れの歌

## &lt;本件に関するお問い合わせ先&gt;

株式会社スペースシャワーネットワーク マーケティング部

TEL:03-3585-3544 FAX:03-3585-3215 <http://www.spaceshowertv.com/>

担当:宮田 維人 080-6860-3800 [miyata@spaceshower.net](mailto:miyata@spaceshower.net)